神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

辻本先生の文学教育

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松永, 京子, MATSUNAGA, Kyoko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2080

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

辻本先生の文学教育

松永　京子

私にとって辻本先生を「送る」というのは妙な体験である。というのも、これまで私は、辻本先生に「送られる」側にあったからだ。1993年4月、私は神戸市外国語大学外国語学部英米学科に入学した。広島の片田舎からやってきた自称「文学少女」が出会った「神戸」は、何もかもが新鮮だった。初めての「都会」。初めての一人暮らし。初めて出会う人々。初めてだらけの大学生活のなかで私が一番魅了されたのは、大学で受講した英米文学の授業だった。そして、この文学の授業のなかで、私は生涯の恩師となる辻本庸子先生と出会うこととなる。

自称「文学少女」が初めて受講した文学の授業は、彼女の人生を大きく変えることとなる。「文学少女」と言っても、大学に入るまでやってきたことといえば、とにかく好きな小説を読み漁るだけ。授業の休憩時間に『ジェーン・エア』の頁をめくり、夜寝る前に布団のなかで『嵐が丘』の頁をめくる。そして数学の時間には、先生に見つかって怒られるまで教科書に挟んだ『風と共に去りぬ』の頁をめくる。もちろん、すべて翻訳されたものである。「少女」はとにかく小説を読み続けてきたが、彼女が本当に「読む」ことを学んだのは、辻本先生の文学の授業のなかであった。

辻本先生が担当された一回生講読の短編小説の授業のことである。それまで翻訳でしか小説を読んだことのなかった私にとって、19世紀の物語を原文で読むことは決して簡単なことではなかった。一行の文章の意味を理解するのに、5回も6回も辞書を使わなければならないのだ。しかも、19世紀アメリカの文化的知識など全く持ち合わせていない。けれども、そうやって苦労して読んだ短編は、いつまでも覚えているものである。特に忘れられないのは、エドガー・アラン・ポーの「アモンティリャードの酒樽」。暗い地下の酒蔵に誘い込まれるフォーチュナード。湿気の多い地下墓地。一つ一つ石を漆喰で固めて壁を作っていく語り手。岩と石の壁に囲まれ、誰にも知られることなく死んでいくフォーチュナード。初めて読んだポーの作品は、陰鬱で、恐ろしいものだった。けれども、この作品を本当に恐ろしいと思うようになったのは、この短編の一場面を絵で表現するようにと辻本先生に指示されてからである。絵を書くよう指示された場面は、複数の人骨の山を描いたシーンで、その位置関係は本短編では重要な役割を

果たしていた。分からない単語を辞書で引き、英語を日本語に置き換えていただけの私は困惑した。絵を描くことができない。言葉では分かっているのに、場面を想像することができないのだ。このとき私は、言葉の意味を理解することと、物語を「読む」という行為は、同じではないことに気づいたのである。小説のなかで起こっていることをヴィジュアルに想像できるとき、物語は時代を超えて、目の前で鮮やかに再現される。辻本先生は、「人骨の山を想像する」という恐ろしい形で、そのことを私たちに教えてくださったのである。

辻本先生の文学教育は、私が卒業するまで続いた。一回生の短編小説の授業をなんとか無事に終えた私は、*The Catcher in the Rye* や *Adventures of Huckleberry Finn* といった「読めそうな」米文学作品を自分で探し出し、原文で読み始めるようになった。John Steinbeck の *The Grapes of Wrath* を読み終えたとき、長編小説を原文で読むことができたのが嬉しくて、ついつい辻本先生に報告してしまった。そして辻本先生からの一言に、私はまたまた項垂れることになる。「時代背景はきちんと理解して読んだの？」もちろん答えは「No」である。浅はかな私は、*The Grapes of Wrath* が 1939 年に出版されたことも、作品が大恐慌を背景としていることも考えずに読んでいたのである。今考えてみると、なんと軽薄な読者だったことか。その後反省し、一回生の講読の授業では口を酸っぱくして時代背景の大切さを語っていることは、受講した学生の皆さんにはすでにおなじみのことだろう。これもまた、辻本先生の教えの一つなのである。

こうして辻本先生から文学の教えを受けた私は、辻本先生に送られて、卒業を迎えた。そして 13 年後の 2011 年 4 月、今度は教員として母校に戻ってくることになった。辻本先生の前でいつも学生だった私は、いまだに学生気分が抜けない。辻本先生の研究室が私の研究室の真上にあったのも、私たちの関係を象徴的に示してはいなかったか。辻本先生は私にとって、いつまでも文学の先生であり、私を送ってくれる人である。だから、いま、辻本先生を「送る」立場となって、私は戸惑っている。

頭上にあった辻本先生の研究室は空っぽになった。けれども、辻本先生の文学の授業は、いつまでも私のなかで続いている。